令和３年度 埼玉県・オハイオ州グローバルスピーカープログラム前期（オンライン）
最終レポート

「OSGS プログラムで得たもの」

蓮見　桃子

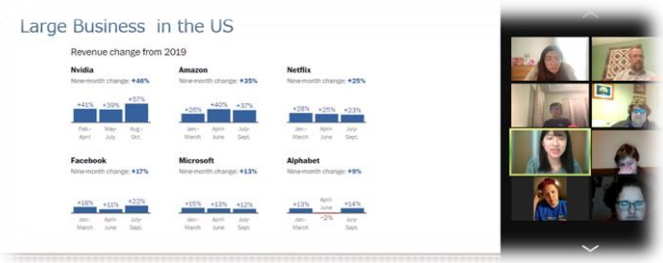
昨年末に実施した最後の授業と、先日オンラインで行われた成果発表会をもって、令和３年度前期の OSGS プログラムが終了致しました。無事に最後まで走りきることができ安心する一方で、プログラムが終わりを迎えてしまい寂しく感じます。オンラインでの授業やセッション、埼玉親善大使としての活動といった充実した日々のお陰で、プログラムの期間は、あっという間に過ぎてしまいました。とても緊張しながら参加した８月の初回の授業が既に懐かしく思えます。正直なところ、この約５か月間は決して楽しいことばかりではありませんでした。授業の度に自分の不甲斐なさに落ち込んだり、慣れない大学生活との両立がうまくいかなかったりすることもありました。それでも、参加を決めたことを後悔はしていません。それほどこのプログラムを通して得たものは多く、今後の成長の糧になるものばかりでした。応募時の想像の何倍もの経験をできたことを本当にありがたく思っています。

今回は、最終レポートとしてプログラム全体を振り返りつつ、私が得たものと、それを今後どのように活かしていきたいかをご報告します。

１．発信力

OSGS プログラムについてお話しするうえで、やはり欠かせないのが「発信力」という言葉です。中間レポート①でもお伝えしたように、このプログラムは「英語で発信する力」を日本にいながら身につけることを目的としています。単なる語学習得のみを目的としていないため、授業では英語で発表する際に気を付けること（話すスピードや目線など）や文章の組み立て方、パワーポイント資料の作成のコツに至るまで「発信力」を身につけるための様々なことを教わりました。また、ミニプレゼンテーションと題して授業の中で教わった方法を実践する機会もありました。これらを通して身につけた「英語で発信する力」を発揮する場として、ファイナルプレゼンテーションと成果発表会という二つの発表の場がありました。

ファイナルプレゼンテーションは年末の最後の授業で行われ、OSGS プログラム参加メンバーがフィンドレー大学の先生や生徒、今までゲストスピーカーとしてセッションに参加していただいた方々に向けて発表をしました。発表の内容は、今回の OSGS プログラム講義のテーマである「日米の新型コロナウイルスへの対応の違い」です。一人一つずつ関心のある分野を選び、それ



ファイナルプレゼンテーションの様子

に関する情報を収集し、現地の方にセッションを通じてインタビューをするなどして、日米を比較しプレゼンにまとめました。私が選んだテーマは「ビジネス」です。このテーマを選んだ理由は、新型コロナウイルスによって世界的に経済活動が影響を受けた中で、日本とアメリカの企業の対応にはどのような違いがあったのか気になったからです。また、アメリカではコロナ禍になる前から国単位でのテレワーク導入が推進されていたということを以前耳にしたため、テレワークへの移行が決してスムーズとは言えなかった日本との違いがあるのではないかと考えました。このファイナルプレゼンテーションに向けた準備は①インターネットを使った情報収集、②日米の比較の仕方を考える、③パワーポイント資料の作成という順番で行いました。中でも苦労したのは、②でした。アメリカの大企業と中小企業、日本の大企業と中小企業という４通りに分けて説明する必要があったため、どの比較方法がより分かりやすく伝えられるか悩みました。フィンドレー大学の Greg 先生にもご相談した結果、大企業と中小企業という大きな括りで分けてから、日米の相違点を述べるという説明の方法にすることになりました。本番当日は緊張しましたが、今までの授業で学んだことを生かしながら自分の考えを発信することができたように感じます。

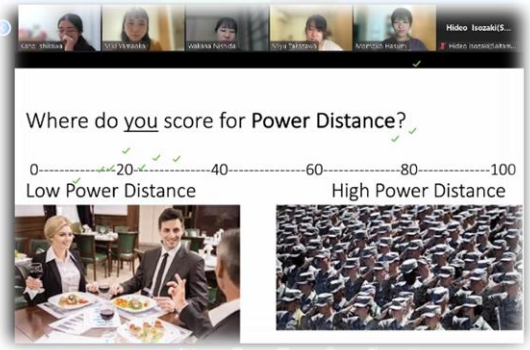
成果発表会の様子

成果発表会は先日オンラインで行われ、プログラムの集大成として、OSGS プログラムで学んだことや海外の大学の授業の様子、現地の方との交流について等を県民の方々に向けて発表しました。プレゼンテーションは英語で行われたのですが、ファイナルプレゼンテーションとの大きな違いは、プログラム参加メンバーの５人で１つの発表を完成させたことです。それぞれが担当する内容を事前に決めたうえで、発表者を交代しながらプレゼンすることにしました。オンラインでの発表ならではの苦労もあり、パワーポイントのページを変えるタイミングやミュート解除のタイミングなど何度か試行錯誤をしながら完成度を高めていきました。そのよりよい発表方法を追求していく過程がグループ発表における発信力を身につけることにも繋がったのではないかと感じます。

２．比較の視点

上に述べたように、令和 3 年度前期の OSGS プログラムは「日米の新型コロナウイルスへの対応の違い」をテーマに講義が行われました。Greg 先生の講義は、まず日本とアメリカの文化の違いについて学んだあと、それらが新型コロナウイルスへの対応にどのように影響したのかを考えるというものだったため、異なる文化を比較する視点を得ることができました。中でも印象に残っているのは、Hofstede の文化次元論を用いて日米の文化や価値

観の違いを学んだときのことです。この授業では権力格差(Power Distance)や個人主義と集団主義(Individualism-Collectivism)をはじめとする 6 つの文化的次元から日本人とアメリカ人のそれぞれの平均値を知るというものでした。授業では、zoom の画面にマークを付ける機能を用いて Greg 先生と生徒 5 人が各自の性格や価値観を共有しました。すると、メンバー間にも差がある、先生が示した位置が日本人の平均値により近いなどといった興味深い結果になりました。このことから考えたのは、国による文化の違いは確かに存在するものの、一人一人の多様な価値観や個性も尊重すべきであるということです。つまり、異なる文化を比較するときは、日本人はこうあるべきだ、アメリカ人ならばこうあるはずだといった先入観を持って決めつけるのべきではないということです。文化や価値観の違いを学ぶとともに個性や多様性も認め合うことの大切さを学びました。



zoom 機能を活用した授業の様子

また、プログラムを通して文化の違いは決して優劣をつけるためのものではないということを学びました。例えば、日本は集団主義を重視する一方でアメリカは個人主義を重視する傾向にあり、それが新型コロナウイルスの対応にどのような影響を与えたのかを考える機会がありました。私は、集団主義は同調圧力を与えているというマイナスなイメージを持っていましたが、そのおかげで日本にいる人の大半は強制されなくてもマスクをしており、感染拡大防止に役立っているのではないかという考えもできることに気が付きました。一方、個人の考えが重視されるアメリカでは、ワクチン接種に対して慎重な意見もあり、人に流されず情報の見極めを各々がしっかり行っているのではないかとも考えられます。このような比較の視点を得たことは、「グローバルスピーカー」になるうえで重要な学びであったと思います。

３．出会い

このプログラムを通じて様々な人に出会えたことは私にとって何ものにも代え難い経験になりました。

まずは、フィンドレー大学の先生や学生、オハイオ州の方々との出会いです。現地に渡航できない中でも、オンラインで繋がりコミュニケーションをとることができたのは貴重な経験でした。特に、フィンドレー大学の学生とはテレビ通話で大学内を案内してもらったり、反対に OSGS プログラム参加メンバーが埼玉を紹介したりと、直接会えない中でも交流を深めることができました。

そして、今回のプログラムに参加したほかのメンバー4 人との出会えたことは、私にとって一番の思い出になりました。令和 3 年度前期の参加者は全員大学生で年が近いため、授業やセッションの際の様子に刺激を受け、自分も頑張ろうという思いにさせてくれました。また、4 人と対面で会う機会があったことで絆が深まり、自分のモチベーションが高まりま

した。このプログラム参加者は埼玉親善大使を委嘱されるのですが、具体的な活動などは特にありませんでした。しかし、親善大使としてどのように埼玉の魅力を伝えることができるか、積極的に意見を出し合い、県産品の紹介や農家訪問、伝統工芸品体験を実施しインスタグラムを通じて発信することができました。この 4 人に出会っていなかったら、親善大使としての活動を通して埼玉県の魅力を知ることも、それを国内外の人に伝えるための機会を得ることもなかったと思います。プログラムに参加して、様々な活動に一緒に取り組んだ 4 人には本当に感謝しています。また、私たちの提案を形にしてくださった国際課の皆様やご協力してくださった県内各地の方々にも、この場を借りて感謝いたします。

メンバーとの思い出

約５か月間のプログラムを通して、私は多くのことを学び、得ることができました。その中で見えてきた自分の課題もあります。それは、積極性という部分です。参加前は積極的に英語を使うことを目標としていましたが、自分の英語が正しく伝わるか自信がなかったり、ほかの人の発言を遮ってしまうのではないかと発言を躊躇してしまったりすることがありました。授業に慣れるにつれ徐々に改善はしたものの、自分の積極性はまだ不十分であると感じています。今後は、失敗や間違いを恐れず、身につけた発信する力や比較の視点を活かして積極的に自分の意見を伝えていきたいです。

今後、この OSGS プログラムに参加したいと思っている方には、英語力の向上だけが目的ではないことや、お互いに高め合える仲間と出会えることがこのプログラムの素晴らしい点であるとお伝えしたいです。令和 3 年度に新たに始まった取り組みであったため、未知な部分も大きかったのですが、プログラムを終えた今、たくさんのことを吸収した実りのある約 5 か月間であったと自信を持って言うことができます。

今回このような貴重な機会を与えてくださった埼玉県国際課の皆様、フィンドレー大学の Greg 先生と川村先生に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。